

全国有数の横穴墓集中地帯・島根

「出雲国」形成の手がかりを示す横穴墓

今から約一四〇〇年前にあたる古墳時代後期、島根県では山の斜面に直接穴を掘って造った部屋に死者を葬る「横穴墓」が爆発的に造られるようになります（詳しくは三巻を参照）。ふつうの墳丘を持つ古墳は、大部分が後世に荒らされていますが、横穴墓は手をつけられていないものも多く、横穴墓の調査例が多い島根は、古墳時代後期の研究者から注目を集めています。

また、横穴墓は次々と同じ部屋に死者を葬る、いわば家族墓です。骨が残っていると、当時の家族制度や社会

制度を知る手がかりになったり、出土品が当時の祭りの様子や死生観を知る手がかりになったりします。横穴墓の形は地域や時代によって異なり、地域のあり方を考える大きな手がかりとなります。実際、同じ形の横穴墓が集中して造られた範囲が、のちに編纂される『出雲国風土記』に記された行政区画と一致したというところもありません。横穴墓は、出雲国の形成を探る重要な手がかりも示してくれるのです。



出土した飾り大刀



高広横穴墓群（安来市黒井田町）
和田団地の造成に伴って調査された横穴墓群。全部で13の横穴墓が調査され、その結果、
1. 玄室（死者を葬る部屋）が丸い天井のドーム状から家の形へ、入口も単なる狭い通路から広い祭りの場へと、横穴墓は変化していった
2. 横穴墓の周囲や上方にも、祭りの場などの施設があった
3. 横穴の中に家の形をした石棺と、2匹の龍を形どった金色の柄頭を持つ大刀など、豪華な副葬品が見つかったことから安来市東部の首長の墓と思われ、墳丘を持たない横穴墓が、さして身分の高くない人の墓とは限らない
といったさまざまな事実が明らかになった。

横穴墓の群れ

…集中して造られた墓…

横穴墓は、一穴だけ独立して造られることはあまりありません。一カ所に四穴、五六穴は当たり前で、数一穴が集中して造られることも珍しくありません。これらは横穴墓の変遷や群の構造を考えるうえで、よい資料となります。ここで紹介するのは、私たちに貴重な情報を提供してくれた横穴墓群です。



高津久横穴墓群（知夫村仁夫）
土砂崩れした崖から20数穴の横穴墓が集中して発見され、調査された。出雲・石見でも類のないほど、多数の玉類が出土した。今は道路脇の崖になっており、ほとんど見る事ができない。



狐谷横穴墓群（松江市山代町）
2段に20穴以上の横穴が並ぶ姿は、さながらアパートのようだ。さらに30穴くらいの横穴が続くと考えられている。中には線を刻んで描いた壁画のあるものもあった。今は住宅団地となっている。



上塩冶横穴墓群（出雲市上塩冶町）
出雲市西南部にある、島根県最大規模の横穴墓群。数百の横穴墓があると推定され、斐伊川放水路事業に伴い、すでに60穴近くが調査されている。岩に掘られた美しい横穴も多く、全国的にも珍しい金糸の出た穴もある。



高広I区1号横穴墓（安来市黒井田町）
大きな基礎石の上に板状の石を載せて入口をふさぐ。石には土器を貼り付けてあり、あたかも封印のようだ。

死者の世界と現世をさえぎる扉

…黄泉の国の入口をふさぐ閉塞石…

横穴墓の入口は、死者の世界への出入口でもありません。当時の人はこの入口を、石や板で厳重にふさぎました。そして、この入口の前で、死者との別れの儀式を行っていたようです。入口を石や板でふさぐのは、死者の眠りを妨げないようにするのと同時に、死者の霊がさまよい出るのを防ぐ意味があったのではないのでしょうか。

板で入口をふさいだ場合はすでに朽ち果てて残っていませんから、現在見られるのは、石でふさがれたものだけです。この石は「閉塞石」と呼ばれますが、横穴墓の内部の調査は、まずこの重い「死の世界への扉」を開くことから始まります。



狐谷15号横穴墓（松江市山代町）
加工された板石で門構えを造り、2枚の扉石でふさいでいる。非常に丁寧な造りで、まさに横穴墓の玄關にふさわしい。



鞆ノ尾2号横穴墓（松江市東長江町）
入口に木の板をはめ込み、それを石でおさえていたようだ。木は腐って残っていない。



大原1号横穴墓（安来市佐久保町）
2枚の板石を並べ、入口をふさいでいる。



岩屋口北11号横穴墓（安来市佐久保町）
きれいに加工された荒島石を組み合わせて、フタをしている。



宮尾C13号横穴墓（島根町大芦）
中形、小形の石を積み重ねて、入口のフタをしている。



楡ノ木谷3支群4号横穴墓（仁摩町天河内）
通路に石を立てて補強し、横穴式石室をまわっている。

発掘ごぼれ話



横穴墓は、土器などが完全な形で残っている場合も多いので、これを狙ってすでに盗掘されていることもあります。ですから、発掘の際に入口が石できっちりふさがれている横穴墓に出会うと、調査員はドキドキします。

ある発掘現場のこと。横穴の前を掘り進むと、完全に入口がふさがれた横穴墓が出てきました。調査員は胸を踊らせながら、石のフタを開けようとした。大きな石のフタは重く、三人で力を合わせてやっとすき間が開いたそのとき、三人の目の前に現れたのは……、なんと白いケムリ！

一四〇〇年前の霊気でも湧ってきたのか、それとも開けてはならない玉手箱だったのか……。その後その調査員たちが、いつきに老け込んだという話はありません。

冷静に考えると、密封されて一定状態に保たれた気温や湿度が、まったく異なる現代の空気と触れたため、一瞬に水蒸気が発生させたのかもしれない。いずれにしても、当時の人びとが作るつとした死後の空間は、みごと一四〇〇年間そのままに保たれていたのです。